

## 研究ノート

## 現代社会における茶道と武士道の役割

小 林 徹

## 要 旨

茶道は平和を追求する作法であり、現代社会に受け継がれている。作法は無駄のない動作と静寂のなかにその価値がみいだされる。武士道は戦う武士が勝利のために規範とするものである。規範のなかに現代人が守り伝えるべき約束事は存在する。しかし武士が存在しない現代においては新しい規範をつくって精神的拠り所とする試みが必要である。

## キーワード

茶道、平和、武士道、新しい規範

## はじめに

この小論を記述したのは小林が過去3年間、国際大学の茶道講座を通じて私なりに会得した作法のもつ意味についてその歴史的背景も含めた上で若干の文章をまとめておきたいと考えたことが第一の動機である。次に近年、何故にかは定かではないが巷の書店に目立つ（武士道）に関する書物を読む機会があって、武士道に関してはかなりその意味するところの受け止め方が人によって異なることに気がついた。とくに時代の違いによって解釈が異なり、自分の都合の良いうように受け取る傾向があるように感じた。とりわけ思想的な面において強調される部分が多いと思われた。しかし、いずれにしても短兵急に解釈を急いで過激な用法のしかたをすると時代の進歩に逆行するという危険性もあると感じたので、幾つかの文献を通じて学習しながら理解することに努めた。茶道と武士道はそれぞれがその時代のなかで個々に発生しながら、時には武家社会において独特の作法でとり行われていたことを考えると、二つの道に関する共通項があるのではないかと、現代社会に生きる自分にとって両者の利便性（極めて不適切な

言葉であるが）は何かという漠然とした思いをもつのである。両者とも内容の選択を誤らなければ限定的ではあるが有用なる道として社会及び個人に一定の貢献をするという漠然とした結論になるのではと予測している。以下の記述を通じて私なりの理解の仕方がある程度ご理解頂ければ幸いである。

## いわゆる道について

言葉の定義は重要であって、これは複数の人間が共同作業を行うときのルールと同じで共通の理解がなされていないと作業は成立しない。スポーツやゲームの予め定められたルールを理解する事と同様の事前作業である。

道という文字の意味する所から考えていきたいと思う。道は主として宗教上の特定の教義という一つの解釈がある。人が考えたり、行ったりする事柄の条理、道理という定義がある（広辞苑）。一方、道自体の意味は人や車が往来する為の所であり、これが転じて使われる様になった。それぞれの道を究めると「その道の達人」ということになる。道の世界はいわゆる筋道を付けるということにも通じ、身体的修練

を事とする世界であって、あらゆる動作を伴う行動は綺麗に迅速にがモットーであることは論をまたない。それは絶対的な行為（礼儀）の世界である。行為がある以上、美しい形があり、動きがあって、何かべつの意味を持つのではなく、その瞬間瞬間が絶対的価値を持つのである（武士道と美・菅野覚明）。ところで話は一転するが、美しい行動は、あるいは視覚的に認知されうる整然とした動作あるいは美的センスを伴って表現されたモノは善であると言い切れるであろうか。ここで善という文字を使うことの意味についても記述しなければならないという不安にかられるが、善と悪については共通の理解がなされているという前提で先に進みたいと思う（しかし善悪の基準は国境を隔てて比較すると、あるいは時代の相違、民族、宗教、教育、自然条件等のさまざまな相違によって解釈がことなることは理解していなければならない）。

美しいものは善であるというのが必ずしも正しくないという事例は無数にあるというのが私の考え方である。俗に（ばらの花には刺がある）というが、たとえば軍隊の分列行進は視覚的に美観を伴う動作であるが、敵味方という概念でみる、あるいは軍隊の本質である暴力に目を向ければ単純に綺麗だ、勇ましいと喜んでばかりもいられない事柄である。歴史的にみて、ナチスドイツの軍隊を例にしたとき、たとえばそのファッション性においてデザインの本質を表現した物として評価することはできるが、周知のごとく第二次大戦以前からユダヤ民族に対する残虐行為の事例は世界に良く知られたことである。政治的な事柄であって軍隊とは関係ないと思える向きもあるだろうが、実力行為は軍隊の専売であるから政治の延長としての軍事行動ないし道徳的にはずれた暴力行為は世界が容認出来ないことは確かなことである。そしてその集団を構成する人物の中に極めて人間的な善的な行為と知性を持ち合わせた人物が居るといふところに人間社会の複雑な側面があると言え

る。最近鑑賞した映画〔戦場のピアニスト〕の最後の場面において、ユダヤ人ピアニストがドイツ将校の求めに応じてピアノを弾くシーンがあるが、観客はこの一点において、全編において繰り広げられた凄惨な殺戮場面から一転してこの人間的側面を垣間見せた将校に好意的な感情をもったであろうと想像するのである。その行為は整然としたドイツ式美観の元に行われたことは良く知られている。大戦中ドイツではカラヤン、フルトベングラーといった指揮者による音楽会が連合国の爆撃下で開催されていたし、軍服の将官たちが威儀を正して鑑賞する姿は礼儀作法に則ったもので一点非の打ち所のないものであったが、彼らの中に親衛隊の虐殺の責任者がいたことは確かであるが、見かけではその区別はできないものであった。（人間は考えることは自由で誰も止めることはできない、矢で射ることも出来ない）というドイツの民謡があるが、まさしくこの歌の意味は正邪の区別なく適用できることで正反対の立場の人によって解釈が異なるという説明が正しいと言えるのではないだろうか。ユダヤ民族からみれば極悪非道の権化であったドイツ帝国において、絵画、音楽の分野では世界の最高レベルのものが国内で温存され、今日のドイツ文化として伝承されている。人間あるいは人間社会の二面性を表すものである。

しつこい様で恐縮であるが、表現されたものの意味を考えないとんでもない解釈の仕方に往生させられる事例をもう少し取り上げてみよう。数年前、フランスのファッションショーの華やかなる会場の出来事であるが、女性のドレスのデザインの中にアウシュビッツの囚人服に似た横縞がデザインされたものが出品され、物議をかもして出品取り消しとなった事件があった。日本ではある歌手がカギ十字の腕章をつけて舞台に登場し、在日フランス人の目にとまって厳しい抗議を受けた。歴史的背景に無知であった結果である。

青森県の弘前における市街地のマンホールの

蓋には市のマークであるカギ十字が鉄蓋の表面にデザインされており、たまたま弘前大学のドイツ人講師に指摘されて順次とりかえるという騒ぎがあった。お寺のマークはナチの旗とは反対であるが、日本地図をみたフランス女性が怒って帰国した等の日本人から見ればなんだそんなことと思われることも大事にいたるということは理解する必要がある。日の丸の国旗のデザインも歴史的解釈を加味して考えると様々な意見ができることは周知の如くであって、先般秋の園遊会で天皇が云われた「国旗の掲揚は強制ではなく」という言葉の持つ意味を重くうけとめる必要がある。天皇は戦後の民主教育をうけており、特にクエーカー教徒（身体を揺さぶる様にして祈る姿からその名前がついたそうで、絶対平和主義を唱える）のブアイニング婦人から英語をならった経緯もあるので、尚更この様に感じるのである。（東京大学教養学部新聞に記載されていたドイツ軍服の歴史と背景に関する記事を参考にした）。日本においても、有名画家の手になる戦争画が戦後永い間国民の目にふれずに保存されていたが最近やっと絵画の芸術性に視点を移して鑑賞する余裕がうまれつつあるときくが、この事は時間の経過のもつ意味の重大さを示唆しているといえよう。やや本筋をはなれた話題になったが、この禅（善）問答はとかく現代人が陥りやすい部分なのでこころしておきたい。科学技術の進歩が善であると信じているおめでたい人間が多数を占める現代社会においてはなおさらのことである。

#### 茶道の説明

ちやどうとも読む。室町時代（1392年 1573年）茶の湯によって精神を修養し、交際礼法を究める道と定義される。千利休に至って大成され、禅の精神を取り入れ、簡素静寂を本体とする侘茶（わびちゃ）をひろめた。利休の子孫は三家に分かれて今日に至り、さらに数多くの流派に分派した。ここで千玄室（裏千家前家元）の（和と思いやりの心 茶道文化の諸相）から

文章の神髓を引用したいと思う。

茶の葉の緑色が自然の色であることから茶を学ぶということは自然を学ぶことに通じると主張している。茶道の点前は人間社会のルールを一碗の茶を通して相手に差し上げるという行為の中に凝縮したものであると云う。和敬清寂の精神が茶道にある。和は平和、調和を表し、隣の人への挨拶は和やかさの表現である。敬は尊敬を表す言葉であり、他人に対する思いやりを深くすることである。茶道とは「スローライフ」を具現化した文化である。清は清潔を表し、現代人の外見的な清潔感を大切にすることと同時に心を清らかにするという浄を忘れてはいけなさと教えている。寂は茶道では心の中が清らかで、何物にも動じないこころを育てることと解されている。茶道の目指している課題は人間の心と心を結ぶコミュニケーションの形成である。一碗のお茶に込められた精神の多様性に心を開いていきたい。

本論とは多少論点がずれるが抹茶と同時に一方の主役は水である。抹茶と湯の割合は厳密なものであろうと考えるのであるが、水のうまさ、まずさは水温の他に水にふくまれる化学成分の量と質に関係してくる。ごく少量の水が使われる茶道では水質は大切な要素である。水の分子集団が小さい天然水がおいしい水の一要素である。余談であるが水道水をおいしくするには陶器製のかめに水を入れておくとかルシュウムが溶けだしておいしくなると言われている。

抹茶のよい香りと味は抹茶自体の質的・栽培地・採集時期等の問題であるが、湯の温度の調整、茶と湯を混合して空気を含ませるという行為は重要な流れである。この一点に亭主は神経を使うこととなる。茶道における時間の流れはゆったりとしたものであって、会席料理の味わいも微妙なものであるから材料の鮮度とともに水を選ぶということにも神経を使う必要がある。

茶道の本質は平和的人間の行為であると同時に生業の為に成すものではないといわれる。近

年異文化社会からの東洋的作法に対する関心の高まりが見られ、大学の留学生で茶道の教授を受ける学生が多いのも素晴らしいことである。作法のちがいの一つとして韓国式茶道では女性が日本とはちがった正座であることに気づき、着物のデザインの違いから納得すると同時に、異なった文化の形式を学ぶこととなった。武士が茶席にはいるときには帯刀しないのが作法であるとのことで、戦乱の世においても束の間の平安を求めて静寂の中に一服の茶をいただくという茶席の存在の意味を納得するのである。これは単なる空想あるいは空論ではないが、戦乱の地（例えばイラク）において盛大な茶会を催すことで一時的に平穏な空間をつくり出すことができたと思うのである。それには強烈なカリスマ性のある人物が指導にあたらないといけないが無駄なエネルギーを投入して民主主義のために盛大な破壊と人殺しを遂行するよりもずっとまじな人間的な価値ある努力目標であると考ええる。

#### 武士道の説明

日本の武士階級に発達した道徳である。鎌倉時代（1185年 1333年）から江戸時代に儒教思想に裏付けられた封建支配体制の観念的支柱とも定義される。儒教は孔子を祖とする教学で、儒学の教えである。儒学は中国古来の政治・道徳の学で、日本には応神天皇の時代に（論語）が伝来し、江戸時代以降社会一般に普及した。

徳川幕府が確立して100年たったころ、人心は太平ムードのなかで安住する気風となり、現代語で云うと弛んだ雰囲気支配的になって、兎角忘却されようとする厳しい生き方を求め書物にあらわしたのが（葉隠）という秘本である。太平の世の到来は多くの人々の支持する世の中の体制であるが、同時に頑張っているという状況からかけ離れるという側面を持っている。従ってその教えの生まれた社会的背景を考慮しないと議論は成り立たない。武士道のキーワードは忠誠・犠牲・信義・恥・礼儀・潔白・質

素・倏約・尚武・名誉・情愛等である。一方、しばしば西欧の騎士道が武士道と比較される。私の感じでは武士道は体制の中の個人の行動規範としての価値観をうたっており、騎士道は中世ヨーロッパのキリスト教の影響を受けた騎士特有の気風で、個人を主体としている様に思えるがいかななものか。騎士道のキーワードは忠誠・勇気・敬神・礼節・名誉・寛容・婦人への奉仕等である。双方に共通する教義は忠誠・名誉・礼儀（礼節）である。武士道の規範、道徳が活用される場合は戦闘の現場であって、武士の最高の価値は戦いに勝つ強さであるから、ただ高貴な道徳として武士道を見る見方（例えば新渡戸稲造の武士道）は本当の武士道の名に値しないという考え方もある。

近現代になって日本が戦争をはじめるにあたって、国家が若者を死地に駆り立てるスローガンとして佐賀藩が徳川時代に記した武士道の秘本〔葉隠（はがくれ）〕の中の一節（武士道といふは死ぬことと見つけたり）を濫用したことが日本の保守層を中心とする社会に記憶されているが、考えてみればキーワードの一部を引用することは武士道の本道から外れることになると言えるだろう。葉隠は封建制度を絶対的なものとして容認することで成り立つ武士の規範である。したがって、いたずらにその成立条件を考えないで現代に再生しようとすることは、ミイラに口紅をさすに等しいと云われても仕方がない。むしろ、歴史的文化遺産のひとつとして研究されるべきだと考える。手元にある葉隠の文言の中から幾つかの教えを記してみる。

知恵を出す工夫・だらだら思案は無益・決断力をもて・大事の思案は軽く、小事の思案は重く・人を批判する方法・招待をうけたときの心得・水清ければ魚棲まず・上には厳しく、下には寛大に・覚悟薄きときは人に転ぜられる事あり・只今がその時、その時が只今・失意のときこそ、くさらずはげめ・武士道は死にもの狂いなり。その心得とは非常の際に全エネルギーを燃やしつくせば通常考えられない力が発揮でき



るということである。

武士道の教えの中から、時の政府が自分の都合で言葉を応用することになると（一般的にはよくやる手であるが）本筋から外れるという批判は妥当である。したがって現代において武士道が全体として日本人の心の支えになるべきだという考えは荒唐無稽な論理となるかもしれない。世界共通のこととして死を命じる者は自分自身は安全圏に居て生き残り、敗者となれば謝罪もろくにせず次の戦を捜し出し（日本がその好例）適当な理屈と愛国心（悪党の最後の隠れ家である サミュエル・ジョンソン）をひけらかして正義をがなりたてるとというのが現実である。したがってそのような事態、要請に直面したら〔貴方が先に死んでくれ〕と言いつけるのが新しい礼儀作法であると考える者である。武士にとって自分に属する全てが戦いに勝つ力でなければならない。したがって、腹がへっては戦ができぬということは正しいが、反面的な言葉として、武士は食はねど高楊枝という言葉もあって理解することが難しいことでもある。ここに文武両道という言葉が出てくるのであろう。内容としては腕力・武芸・精神（胆力・判断力・統率力）言葉・経済力等がキーワードになる。ここで、新渡戸稲造の武士道から私が納得できる部分の文章を引用してみる（17章、武士道の将来）。武士道と似ている騎士道は封建制度から離れてキリスト教によって新しい生命を得た。一方、武士道はこれを養育する程の大宗教がなかったため、封建制度の崩壊とともに孤児となった。1870年（明治3年）廃藩置県が公布され、5年後の廃刀令で武士道の甲の鐘がならされることになった。近代軍隊の組織の中に武士道を保護するという考えがあるが現代の戦争のなかには武士道が成長しつづける余地は殆どない。しかし近現代史における武士道精神に基づく軍人の行為として評価される事例はゼロではない。幾つかの事例を紹介したい。1918年代の第一次大戦における敵国ドイツの捕虜（中国のチンタオのドイツ植民地軍）を収容

していた徳島県の板東俘虜収容所における捕虜の取り扱いが人間的であったことは事実で、司令官であった松江豊寿陸軍大佐の軍人としての態度は武士道の礼儀・名誉の部分に相当すると考えられる。恐らく江戸時代末期の侍の心が言い伝えられていたと想像するのである。（この内容については本校第一期卒業生・上畑杏奈の卒業論文（細田ゼミ）に詳しい報告がある）。当時の日本は近代国家としての成長期にあって、世界からの認知を必要としており、政府の方針も〔国家の為に戦った敵兵を手厚く保護する〕ことであったといわれる。皇族が収容所を訪問することもあり、収容所内の規律の範囲でドイツ兵の私的生活のかなりの部分が保証されていた。第九の演奏がおこなわれたり、釈放後、日本に住みついてレストラン（ケテル、ローマイヤー等は東京に現存している）の経営や菓子職人（バウムクーヘン）として名を残した人物もいた。当時の収容所付近にドイツ資料館が開館しており、観光的作用も担っている。

他の事例では第二次大戦初期（1942年3月2日）インドネシアのスラバヤ沖海戦で日本海軍に撃沈された英国駆逐艦の英国兵400人が救命ボートで漂流しているのを発見した別の日本海軍の駆逐艦が全員を救助した事実があった。日本海軍の士官は水兵が英国兵に危害をくわえるのではないかと危惧したが、懸命に救助する姿を見て涙したという。

救助されたイギリスの士官は戦後体験記の中で日本兵の行為を騎士道と讃えた（2003年10月12日朝日新聞）。この種の美談に類する話は掘り起こせばかなり出てくると予想される。1941年のリトアニアに於けるユダヤ人の救出に功績を残したといわれる、当時外務省の役人であった杉原千畝の行為について若干ふれたい。ポーランド、ドイツ等から脱出を図る多数のユダヤ人は日本の通過ビザによって最終的にアメリカ、日本、カリブ海のキュラソ等に行けるといふ噂を信じて、リトアニアの日本領事館に集まった所、事態の深刻さを懸念した杉原は日本

外務省の意向に反して通過ビザを1800枚程手書きで発行したという事実である。当時日本は三国同盟でナチスドイツとは手を組んでおり、当然反ユダヤということになるから余程の勇氣と判断力、身の危険をおかさなければ出来なかった行為である。今日では日本人の武士道、正義感の現れとしてイスラエル国で人道の人として評価されている。小林はイスラエル訪問の際、記念植樹された杉原の名を冠した針葉樹をみたが、同行の日本人は殆ど知らなかった。シンドラのリストと言う映画に因んで日本のシンドラと言われている様である。杉原の件に関しては、1994年の9月に島根県の八尾津にある杉原記念公園において日系米人（元米国陸軍442、522、100、MIS＝陸軍情報部隊等の退役軍人）救出されたユダヤ人（国籍はイスラエル、アメリカ）等の記念集会に参加してこの情報を確かめた。その後これらに關係する写真展を東大教養学部で駒場祭で開催した（アメリカ・イスラエル両大使館後援）。またこの集会で当時の自民党副総裁であった、後藤田正治の演説の中で（これからの外交問題は銃剣によってではなくして、すべては話し合いの鉄則を厳守すべし）という気合の入った言葉が脳裏に刻みこまれている。このシーンはビデオに撮影して証拠として保存している。しかしこれらの数少ない正道としての話題に反して、第二次大戦の日本軍の残虐行為に関する報告は非常に多く、幾多の戦争の歴史の中でも群を抜いており、この件に関する国家としての調査と結論に基づく適切な謝罪・補償は武士道のなかの名誉に係わる事柄であると考えている（この件に関しては（小林・等身大の地球学（学文社）133頁）参照）。後述の映画では武士道は今日のアメリカでは好意的に受け止められている様だが、戦時下においては、例えば（菊と刀＝ベネディクト）（火薬を湿らせるな）といった対日關係の著書では必ずしもそうではないというわけで、精神的な意味合いを含んだ解釈は時代によって異なることを理解する必要がある。他方、勇氣、献身といっ

た戦時下における兵士の活動の矛先は、例えばヨーロッパ前線におけるテキサス部隊の救出に当たられた日系米兵の万歳突撃についてはアメリカ側で称賛されるといった具合である。1900年初頭にアメリカに移住した日本人は最近になって義理・忠誠・我慢・大和魂といった精神的支柱があったからこそ少数派でありながら今日の社会的地位を築く土台となったとの評価が高くなっている。これらの資料はロスアンゼルスのリトルトーキョーにある全米日系人博物館に収集されている。

ここで（現代社会に生きる武士道）という文章（国際日本文化研究センター教授・川勝平太；毎日新聞2004年5月16日）の要約を通じてひとつの考え方を紹介したいと思う。

アテネオリンピックにおけるシンクロスイミングに武士道という演目があったが、これは男の伝統倫理としての武士道の通念を現代女性があでやかにはねのけたとみている。

映画（ラスト・サムライ）は新渡戸稲造（武士道）の感化を受けた監督、主演のトム・クルーズによって武士道の規範たる義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義、克己、武士の魂としての刀にいたる細部にわたる解説がなされている。武士道とキリスト教を両立した人物として内村鑑三（著書のひとつに「代表的日本人」がある）を上げている。内村は最高の武士として西郷隆盛（上記映画の主演モデル）を激賞した。しかし西郷は征韓論を唱えた人物として、現代の朝鮮民族から見れば好ましがらざる人物であろう。ここに歴史は両面から検討する必要があることを示唆しているのである（小林）。札幌農学校（北海道大学の前身）で新渡戸も内村も学んだが、同校は（少年よ、大志を抱け）で知られるクラーク博士（先年博士の子孫が同校を訪問した）がキリスト教に基づく人格教育をした。このアメリカのフロンティアスピリットを武士の子孫が学んだという訳である。川勝は日米の絆は武士道であると言及している。ドナルド・キーン（アメリカの日本文化研究者）の（明治

天皇)という著書では、天皇を大帝として最後のサムライと絶賛している。その訳は日清戦争を含め戦争を徹頭徹尾回避した人物として理解しているからである。しかし歴史の現実日本の西洋化・近代化と共に侵略戦争といわれる太平洋戦争に至るまで平和的手段とはほど遠い手段で今日の日本に至っていることも事実である(小林)。

川勝の最後の章でイラク戦争は不名誉なことだからアメリカに日本は撤退という勧告を武士道の本家として教導する場面があってよいという言葉で結んでいる。誤りを潔く認めることこそ武士道の本筋であるという解釈である。全体として文句の付けどころのない意見であるが、現実の政治、社会の進行過程では武士道どころか最低の掟すら守られていないのが本当の姿ではないか。子供の教育もさることながら、親の教育が必要と思われるが、では誰が教育に携わるか、つまり誰が(猫に鈴を付けるか)という問題に帰結してしまうと思うのである。

まとめにかえて

二つの道について内容的に偏りがありすぎて、公平さに欠ける結果になったのは全て私の責任であることを百も承知の上でとりあえず締め括りの文章としたい。

茶道と武士道を比較してみると、前者は平和のイメージが強く、後者は戦いのイメージである。人間には優しさと暴力性の相反する気質が備わっているようで生物学的にも認められる。大脳皮質の中に1万年以上もの昔から両者は同居しており、生きている限り失われることはない。理想論としては両者のバランスが崩れた時に争いが生じるのであるから仮りに平和を希求したければあらゆる策を講じて絶えずバランスを保つ様努力することが必要である。俗にいう(治にいて乱を忘れず)という古い言葉の意味を考えろということである。茶道に関して、武家社会で束の間の平和な一時を一杯の茶にたくし、日本刀のかわりに扇子を携えて茶席に望ん

だ武士達の行為は人間の心・身体・知性の微妙なバランスの上に成り立つ行為と受け止めることが出来る。現代の目で見ると平安の心の展開を目指してひたすら精進することが、そして茶道を世界に広めることがもっとり早い平和の戦略である。2003年10月、恒例の九州文化学園の観月の茶会が挙行された折に私は大学側で初めての亭主を勤めさせていただくことになった。会場の近くに佐世保米海軍の基地があって、その一年前ニューヨークで9・11のテロ爆破事件があったため基地のゲートは武器をもった兵士、機動隊が緊張して警備していた。もし、ここで事件が発生したら茶会の会場も無事ではすまないと思ったが、そんなことを考えているのは私一人のように思えた。つまり人間というのは思考を切り換えて自身の都合の良いように事態を解釈する動物であるということである。茶会の参加者は100人以上であったと思われるが、私がひとり一世一代の亭主として箱茶を脇に薄茶をいれる行為に格闘している間、全ての客人が無人の如く物音一つしない雰囲気醸し出していた。誰が命じるでもなく自然体でそのようになるということにある種の感動をおぼえた。天空には満月が見られ、すすきをいけた大きな瓶を前にして羽織、袴の小生が形のみの茶の作法を執り行っている瞬間、平穏な時が存在した。もし世界中の人間が私に注目していたらその瞬間に世界は平和な雰囲気に包まれる筈であると考えたものである。先の大戦末期、フィリピン占領中の日本軍司令官が抹茶を持参して米軍の俘虜になったことを伝え聞いたが、近代戦においても茶道の心得を保持しつつ戦いも行ふという人間が存在していた訳で、一つの考えとしては、人間社会は矛盾の上に存在するということを認めざるをえない思いになった。自然保護をうたいながら都市環境は自然環境に遠く、僅かな公園の存在で間に合わせるというご都合主義に徹しているのが現状である。しかし、一輪の花が生け花として存在するだけで自然を感じるということ、日本庭園の箱庭の景観

が日本人の自然観を現しているということが自然への願望の現れであるとも解釈できよう。

武士道に関して、私見としてはキーワードの何れかを座右の名として心の支えにすることに異存はないが、今日の風潮である保守的・右翼的陣営の声高な宣伝、応用に対してはまっぴらおことわりである。前述したように武士あるいは西洋の騎士の消滅とともに現代に残されたものは文章或いは形を真似た物（者）が存在するのみである。ただ歴史を語り継ぐことは大切であり、現代流の解釈で良いとこ取りをするのも自由であろう。これ等のことは本物がない以上致し方ないことであろう。新しい酒は新しい革袋へということからすれば、武士道にかわる新しい道德、掟といったものを国民全体が構築するように努力しなければならないのではないか。平和が続くと英雄がいなくなる、しかし、人間は英雄を求める、現代はさしずめ野球やサッカーの選手ということになるか。紙幣に取り上げられる人物は人格高潔であるという印象であるが何れにしても政教分離が建前の日本においては両道に含まれる言葉・意味を深く理解した上でそれらの意味するところを教育に反映出来ないかと考えているところである。

#### 参考文献

- 朝日新聞（2003年10月12日）  
毎日新聞（2004年5月16日）  
林啓介：板東俘虜収容所 南海ブックス 昭和53年  
鳴門市ドイツ館：（どこにしようと、そこがドイツだ）平成15年3月31日  
鳴門市ドイツ館資料研究会：デイ・バラック、第1・2巻  
上畑杏奈：徳島に於ける第一次大戦時の板東俘虜収容所について、長崎国際大学卒業論文2004年3月（第一回卒業生）  
新渡戸稲造：武士道 講談社インターナショナル(株) 2004年1月16日  
山本常朝・田代陣基：葉隠 徳間書店 2003年7月25日  
堀内国彦：茶の湯の科学入門 淡交社 平成15年10月4日  
文芸春秋：和の心日本の美；2004年9月臨時増刊号 平成16年9月15日  
ゾラフ・バルハフテイク著、滝川義人訳：日本に来たユダヤ難民、原書房 1994年10月7日  
ドロシー・マツオ著、新庄哲夫訳：若者たちの戦場・アメリカ日系二世第442部隊の生と死 ほるぶ出版 1994年9月215日  
小林徹；等身大の地球学 学文社 2003年6月25日